



放射線心身症？

—福島原発放射線より日常にあるはるかに恐ろしいもの—

加藤直哉 著



著者の本書執筆の動機は極めて真摯な純粋なものであり、本書の「低線量率放射線は大丈夫である」というメッセージは、時宜にかなったものである。著者は、過剰に放射能恐怖を煽る言説に対して、様々な科学的根拠を提示して丁寧に批判

しているが、それは大変説得的である。この1年、多くの学者、知識人、評論家がメディアに登場して語った。少しの放射性物質でも危険である、とする中部地方の某大学教授は、「東北の農作物は一切食べるな」と言って、農業従事者の心をいたく傷つけた。また、福島第一原子力発電所事故の初期に、元東京電力(株)の役員で国会議員であった某氏が、「ホルミシスという考えもあるのだから、今の福島は状況は心配ない」と新聞紙上で語ったことで、特に福島県民の心を逆撫でした。氏の時と立場をわきまえない発言は、“低線量率放射線”に関する学問的議論の活発化を著しく妨げた。また、有名な元自衛隊幹部の政治的言説の中に、どういう理由か分からないが、“ホルミシス”理論が取り込まれることによって、これまた極めて“政治性”を帯びた問題にすり替えられてしまった。英文学者の渡部昇一氏は「月刊 WiLL 4月号」に「明るい未来への道筋 原発関国論！」という論考を寄稿し、「汚染は利用できる」などと、福島県民の心情を逆なでするよう

な説を展開している。語るべき人でない人たちが、メディアに登場して饒舌に語ることによって、どれだけ多くの人たちを混乱させてきたことであろうか。

このような状況の中で、本書は、“低線量率放射線”に関する極めて有用な情報を提供してくれる書物となった。以下、本書の内容に従って筆者の感想を述べたい。第一部の「放射線と人体の本当の話」では、現時点で問題となっている低線量の放射線について非常に分かりやすくまとめている。また、第二部では、「放射線よりはるかに恐ろしい日常の話」として、偏った情報に基づく“風評被害”の問題が鋭く指摘されている。「砂糖とがんの関係」など、著者の豊富な栄養学的知識に基づく、バランス感覚のとれたリスク評価が提案されている。国立がんセンターのがんの相対リスク表を示し、現状の放射性物質よりはるかに恐ろしいリスクが、説得力を持って読者に伝えられている。

最後に、「放射線心身症？」というタイトルに関する私の違和感を率直に述べておきたい。私も、福島における“低線量率放射線”は、健康リスクにならないと考えており、著者と全く同じ立場に立つ者である。しかし、“有無を言わず被ばくさせられた”という体験は、間違いなく“心的外傷”となっている。今、福島県民の心を覆っている気分は、東日本大震災・福島第一原発事故後、早期に表れた“困難に立ち向かう勇気”“絆”などといったものが薄れ、喪失感や不安・恐怖、抑うつ状態が顕在化してきている。それは、著者の言う“心身症”や通常の“心的外傷”、PTSD理論では説明できない、様々な臨床像を示している。例えば、家族病理や、潜伏していた過去のトラウマ体験の顕在化などである。“3.11以来、世の中が、全く別な色に見え、慣れ親しんだ風景がよそよそしく感じられ（現実遊離感）、一生懸命やってきたことが、無意味なことのように思われ、内面的生活や価値体系が崩壊してしまう”という深刻な問題まで起きている。原発事故が人類に与えた影響は甚大であると、つくづく思う。

(富永国比古 ロマリンドクリニック)

(ISBN978-4-86003-505-1, 新書判 208頁, 定価本体1,200円, 医療科学社, ☎03-3818-9821, 2011年)